

アイデンティティ構築のジレンマ

ー精神障害を語るナラティブを事例にー

周氷竹(大阪大学大学院生)

1. はじめに

本研究では、精神障害当事者へのインタビューナラティブの談話分析を通じ、そのアイデンティティを話者の語りにあらわれる他者との関係性に基づいた「ポジショニング（立ち位置）」にとらえ、Bamberg (2011, 2012) の提唱するアイデンティティ構築の3つのジレンマを用いて検証し、その語りの中にどのようなアイデンティティがどのように表出しているかを明らかにする。これを通して、精神障害当事者のアイデンティティ構築の一端を示すことが本研究の目的である。このように、相互行為的社会言語学の視点から精神障害当事者のアイデンティティ構築を詳察することで、また蓄積の少ないといえる精神障害者の語りの研究に一石を投じたい。

2. 先行研究と理論的枠組み

近年、精神障害者の語りが重視されつつ、精神障害者の語りに焦点を当てる研究がなされてきた（田中 2000a, 北村 2004, 岩本 2007, 栄 2014などを参照）。その中で、医療的な焦点を当てて、当事者の語りを医療に活かそうとする研究が多く、当事者の語りの中に現れ構築されるアイデンティティを分析する研究がほぼ見られない。そこで、本研究は精神障害者によるナラティブを相互行為の一種とみなし、「何をどのように語ったか」を重要視する相互行為的社会言語学という視点から、当事者のアイデンティティ構築を考察する。

理論的枠組みとして本研究の分析で援用する「ポジショニング」（Bamberg 1997, 秦 2014）は、社会的構成主義を背景とした立場づけの概念である。ポジショニング理論では、アイデンティティは常に固定されたものではなく、複数の談話的实践を通じて、構成/再構成されるもので、相互行為のプロセスで立ち現れるものであるとされている

(Davies and Harré 1990)。したがって、ポジショニング理論における自己は、他者との関係性の中で、また、その場その場の語りの中で生み出される流動的なものである。会話参与者のポジショニングを分析することで、表出するアイデンティティを明らかにすることができると考えられる。

本研究が依拠するもう一つの理論的枠組みとして、Bamberg (2011, 2012) の提唱するアイデンティティ構築の3つのジレンマがある（村田2020）。3つのジレンマは①同質・異質 (sameness/difference) : 会話参与者が自らを他者と同じ・違う立場であることを強調すること、②能動性・受動性 (agency/passivity) : 会話参与者が自分が主体性を持つか・持たないかという立場を位置付けること、③連続性・非連続性 (constancy/change) : 会話参与者が現在の自分と過去の自分を比較し、一貫性をもつ自分、あるいは新しい自分になることを強調することである。上記の3つのジレンマを検証することで、異なる側面から包括的に会話参与者のアイデンティティ構築をとらえることが可能となるのである。

3. データの詳細

本研究で用いるデータは2019年11月と2020年6月の2回に分けて収録されたものである。インタビューではインタビューMの精神障害に関するライフストーリーを語ってもらったが、可能な限り自然な発話が得られるように半構造化インタビューの形を取った。2回目のインタビューは、初回のインタビューに疑問を感じたところがあったため、その内容を巡って、もう一度語ってもらうために行ったフィードバック・インタビューとなっている。MとZは一度面識のある関係である。2回のインタビューともMのよく通う、駅前の喫茶店というリラックスできる場所で行った。録画はインタビューの負担が大きいと判断したため、録音のみとなった。1回目のインタビューの長さは1時間57分で、2回目のインタビューの長さは2時間28分である。

また、倫理的な配慮としては、研究協力者 M は精神障害の回復度が高く、具体的には 10 年以上の安定した地域生活を続けている人物であり、自己の人生を語ることに積極的に調査に対する協力的な姿勢と同意を得て行った。また、精神障害に関するライフストーリーについて聴きたい旨を明記したインフォームド・コンセントをとった。インタビュアー（筆者、Z）とインタビューイ（M）の基礎情報は以下の通りである。

会話参与者	年齢	職業	性別	国籍	精神障害の有無
M（インタビューイ）	40 代	無職	女性	日本	有（10 代の後半から）
Z（筆者、インタビュアー）	20 代	学生	女性	中国	無

表 1. インタビュー参与者の基礎情報

4. データ分析

データ 1 は 2 回目のインタビューの最後で、M と Z が病気に伴う特徴について話している場面である。データ 1 に入る前に、M は「Z さん、まとまりました？」と調査者の Z に聞き、自分の話を上手く理解したかを確認した。その後、病気に伴う特徴について話し始める。

データ 1

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 M: | 私もね。ずっと病気にかかって。失語 | 21 M: | もうこんなね。病気になったら。 |
| 2 | 症で。だからね。言葉がね。上手いこと | 22 | 一発やからね。気をつけてください |
| 3 | 喋れなかったのね。今もそうやねんけど。 | 23 | ね。Z さんも。大丈夫やと思う。芯がし |
| 4 | 何か。うまいこと伝わってるかなって | 24 | っかりしてそうやから。 |
| 5 | ちょっと不安ですわ。うん。それは | 25 Z: | 一発っていうと。ど。どういう感じで。 |
| 6 | 言うときます。だから断片的に | 26 M: | だから。完全にすべてダメになる。 |
| 7 | しかししゃべれない。そんなにね。繋い | 27 | すべてダメになって。精神的に病ん |
| 8 | で喋ることはできないから。うまいこ | 28 | だら。すべてダメになっちゃうから。 |
| 9 | と。うん。 | 29 | だから仕事もできないでしょう。そう |
| 10 Z: | 友達も。前回は言いました。友達も | 30 | なったら。だからね。 |
| 11 | 統合失調症に。なって。 | 31 Z: | そうですね。友達は今卒業論文で |
| 12 M: | 言うてたね。そやねん。大学は一緒の | 32 | 悩んでいまして。自分は書けない |
| 13 | 子？ | 33 | と。と思って。 |
| 14 Z: | 大学は一緒。 | 34 M: | 書けられへんやろうね。統合失調症 |
| 15 M: | あ。そうなんや。え。それ。学校行って | 35 | やから。私もとても無理やわ。 |
| 16 | ます？その人。 | 36 Z: | その人。その人は自分は集中できない |
| 17 Z: | 今は。今は行ってないです。今中国に | 37 | って。言っていました。 |
| 18 | 帰りました。 | 38 M: | 私も集中できない。気が散漫やねんね |
| 19 M: | あ。そうなんや。大変やね。 | 39 | それ以上。散漫になるの。 |
| 20 Z: | うん。 | | |

M はまず病気にかかったため、自分が「うまいこと」「しゃべれない」（7-9 行目）という事情を告白した。ソ系指示詞は話し手の領域外のものを指示する機能がある。ここでは、M は「そんなに」（7 行目）の使用をすることにより、自分のことを「繋いで」喋れる者と比較し、うまいこと喋れない者と位置付け、異質的な側面を強調している。

続いて、Z が同じ病気にかかった友達のことを持ち出したあと、M は Z と登場人物である「友達」との関係、また、「友達」の現状について尋ねる。その後、M は「一発」という表現を用いて病気のもたらす激変を名詞化し、過去に普通に生活する自己と現在の「すべてダメになっちゃう」自己の構築が遂行されている。続いて、Z に対して、「気をつけてくださいね」と言い、Z を精神障害に罹患したことがない未体験者（ノービス）として位置づけた上で、自らを精神障害を経験したアドバイザー（エキスパート）に位置付け、その立場から助言を与えている。ここでは、M は単に精神障害の罹患者としての自身の位置付けを行うだけでなく、相互行為の中で、Z よりも多くの情報や経験を

持った者として両者に「インタビューイーとインタビュアー」という位置付け以上の、自分の方が優位となる立場の不均衡性を構築している。

データ1の終わりの部分で(29-39行目), Mは積極的にZの友達と自分とを重ねて語ろうとする。「仕事もできないでしょう」(29行目)では、自分のできないことを、登場人物のZの友達もできないと推測している。また、「書けられへんやろうね」(34行目), 「私も無理やわ」(35行目)では、登場人物であるZの友達ができないこと、つまり、書くことは、自分にとっても「無理」と語っている。そして、「私も集中できない」と言い、共通の症状があることを自ら積極的に表している。これらのことから、Mと同じく精神障害当事者である登場人物の「友達」と同調する様子が分かる。

ここで、Bambergの提唱する3つのジレンマを用いてデータ1を検証する。まず、①同質・異質(sameness/difference)の面では、Mは自己を「繋いで喋れない人」と位置づけ、自分の異質的な特徴が強調されている。その一方、Zの語りで登場した、類似する症状のある「Zの友達」と同調する様子から、Mは相互行為を通じて精神障害当事者コミュニティに帰属する志向が確認できた。このことは、MとZの友達の同質性を表すとともに、Zとの異質性をも表していることとなった。次に、②能動性・受動性(agency/passivity)の面では、Mの語りでは動詞の否定型(「喋れない」, 「仕事もできない」など)が頻繁に使用されていることから、病気にかかったMが日常生活では病気に対して受動的な態度をとっていることが示唆される。しかし、データ1の語りにおいてはZの友達について関心を示し、自ら積極的に情報を出し、能動的な一面を見せていることが観察された。つまり、Mは経験者・アドバイザーの立場にたって、自分の精神障害にかかった経験を活かすことができる話題に機敏に反応し、情報を提供できるような話しやすさがあれば、能動性を発揮することが明確になった。最後に、③連続性・非連続性(constancy/change)については、断片的にしか喋れないという冒頭の語りから、Zの友達の話で自らにアドバンテージがある話題になると、1文が長くなる傾向となり自らターンをとって話しており、このことから、データ1の一連の会話にはある種の非連続性があると考えられる。一方で、精神障害者としてのアイデンティティは一貫しており、その点は連続性の中で表現されている。「一発」という言葉から、Mにとっては、病気が人生の大きなターニング・ポイントで、病気により、自分の人生がマイナスの方向性で一変したことが確認できた。

次のデータ2は、MとZが結婚という話題について語り合う場面である。データ2に入る前に、Mは結婚したくないという自分の意思を示し、それに続き、そのように考えるに至った理由を以下のように語っている。

データ2

40	M:	あたし。XX(Mの年齢)やからね。うん	47	ろとは言わなかった。でも。
41	Z:	そういう結婚したくないと考えて	48	いずれもしてほしいとは
42		いるの。親からのプレッシャー。	49	思ってたと思う。うん。でも。
43		圧力がないですか?	50	私がね。精神病を患ってから。
44	M:	あ。それはね。なかった。	51	そういうことはもうダメだなと
45	Z:	えっ	52	いうのはわかったと思うのよね。
46	M:	お母さんも。お父さんも。別に結婚し	53	望めないというのは。

ZはMの結婚したくないという意思に対して、Mの両親の態度、つまり「プレッシャー」(42行目), 「圧力」(43行目)を与えるか否かを聞き始める。Mの「なかった」(44行目)という回答は、Zに「えっ」(45行目)という驚きをもって捉えられたため、Mは両親が「結婚しろとは言わなかった」(46, 47行目)と繰り返して協調し、その理由を48-53行間で推測する。48-53行間のMによる両親の考えへの推測を通じて、精神障害当事者Mと家族の病気についての一定の「家庭内の通念」が映し出されていると考えられる。自分の「精神病」(50行目)という指標の提示だけで娘が結婚しないことを受け入れた理由を説明している。この語りから、精神障害にかかったため、結婚できないというのが家庭内の通念であることが見受けられた。また、「望まない」ではなく、不可能性を込めた「望めない」(53行目)という言葉から、精神障害当事者MとMの家族は婚姻を望ましいものと捉えている様子がみられる。

3つのジレンマにより、以下のように考察することができる。データ2では、①同質・異質(sameness/difference)に関する自己表出は両親との間の通念として示された、「一般的に精神障害を患ったら結婚は難しいと思っている両親と私」という意見、立場の同質性が見受けられた。そして、45行目ではその考えがなく驚きを表しているZの異質性を結果的に表出させている。②能動性・受動性(agency/passivity)の面では、「もうダメだな」(51行目),

「望めない」(53行目)の使用により、Mと家族は精神障害にかかった時点で結婚の可能性を失うと思い、婚姻に対して無力感を覚えているMの自己像も窺える。③連続性・非連続性(constancy/change)については、一貫した精神障害を持つ自己の構築がなされている。

以下のデータ3はMは自分のアイデンティティ、つまり、自分のことをどう思うかについて直接的に言及する場面である。

データ3

54	M:	ね。私ね。だから。私。今の私が自分	61	と。そういうことに関わった仕事
55		ていうことがとても思えない。私がこん	62	したかったのね。
56		なんじゃないと思う。だから昔病気になる		(中略)
57		前の15歳以前の私。まともな私に戻りた	64	Z: はい。
58		い。だから。その時はね。本を読んだり	65	M: そうというのがやりたくて。あ。アーテ
59		とか。詩を書いたりとかしてたんです	66	ィストになりたかったかな。子どもの
60		ね。そういう創作活動。ブレイクなこ	67	時は。

Mは「今の私」(54行目)に対して不満を持ち、「15歳以前の私」(57行目)に戻りたいという。Mが「15歳以前の私」に戻りたいと思うのは、今でも15歳の時のような未来への展望を持ちたい、多くの未来への可能性を持っていたいと思っているからだと考えられる。「今の私」は本来であれば、アーティストになれるはずだが、「今の私」は思ったような自分になっていない。3つのジレンマから見れば、Mの語りでは、自分ではない「今の私」と、本を読む、詩を書く、まともな「15歳以前の私」が非連続的なものとして表されている。しかし、その頃の自分と今の自分が同じ「そういうのがやりた」(65行目)い希望を持つ自己としての連続性や同質性が描かれており、こうありたいという未来像は今も昔も変わらず持ち続けていることを表している。一方で、その未来像にたどり着くような昔の自分とそれを望むべくもない今の自分を「今の私が自分ていうことがとても思えない」(54-55行目)と、非連続性と異質性を同時に表出させている。

5. 考察とまとめ

本研究では、精神障害当事者Mの語りを分析対象にし、Bamberg(2011, 2012)の3つのジレンマを参考にしつつ、ポジショニング分析を試みた。①同質・異質(sameness/difference)、②能動性・受動性(agency/passivity)、③連続性・非連続性(constancy/change)といった指標に関するアイデンティティ構築が常に相互に絡み合いつつ、遂行していることが確認できた。分析を通じて、精神障害というマイルストーンにより、「過去の、病気の無い、有能な自分」(本を読む、詩を書く、まともな自己)と「現在の、病気にかかった、無力な自分」(喋れない、仕事できない、結婚できない自己)が常に表出され、Mは過去と現在、病気の無い他人と病気のある自分との間で、線引きし、自己否定を繰り返す姿が浮き彫りになった。それと同時に、精神障害の経験者として会話する相手に意見を与え、相互行為の場で、能動性のある自己も露呈されたことから、連帯を求め、主体性を発揮し、境界を越える努力も見られている。

参考文献(抜粋)

- 秦かおり(2014) 国外在住邦人が語る東日本大震災: 対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する. 言語文化研究 40, 123-142.
- 村田和代(2020) 日本在住日系人へのインタビューナラティブの談話分析: 表出するアイデンティティに着目して. 秦かおり・村田和代編『ナラティブ研究の可能性-語りが生み出す社会』3-24, ひつじ書房.
- Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7, pp.335 - 342.
- Bamberg, M.(2011). Who am I? Narration and its contribution to self and identity. *Theory & Psychology*, 21(1):pp.3-24.
- Bamberg, M.(2012). Why narrative? *Narrative Inquiry*, 22(1):pp.202-210.
- Davies, B. and Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20, pp.43-63.